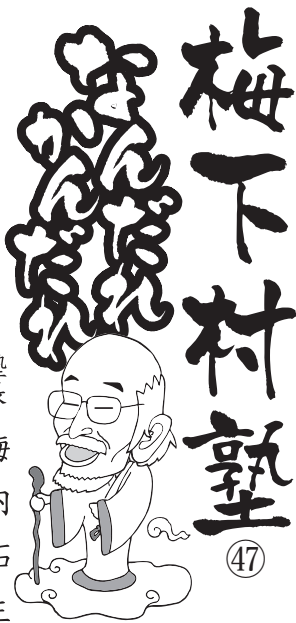


「森と水と命の惑星」国際会議

～地域と世界の心と魂を詠む～



塾長 梅内拓生

東海文芸 渚句会
(5月) 兼題「柿若葉」
雑詠 6月8日

（自然と命のつながり）

命名の筆しなやかに
柿若葉

初燕被災校舎を巡り
けり (刈谷 則子)

齢重ね田植えの手元
追いつかず
咲きわけの見よとば
かりに牡丹かな
(古水タマ子)

草若葉は春、木若葉は夏の季語であるといわれております。柿若葉の初夏に児が生まれ、祖父母、両親、家族が集まり命名の祝儀をする。大震災で壊れた校舎にも、遠い南の国から、燕が返ってきて飛んでいる。(自然と命のつながり)の世界が詠まれておりま

す。

田植えをしている

が、手元が追いつかない。老いたなあ！畔の向こうを見ると牡丹が生き生きとして咲きだしている。人生にも季節にも区切があり、それらは巡り巡ってつながっているものだなあ！

誕生と死、若と老、幸福と不幸、平穏と震災、千変万化の中での(自然と命のつながり)の世界の姿が浮かびます。

兼題「冷奴」 雑詠
みさご句会 6月句会

「自慢でも愚痴でもよろし冷奴」

「大夕焼被災山河をつみけり」

(舟野 広)

夏の冷奴、薬味を加減して、一人で食べても、家族で食べても、酒の肴にして友人と一

緒に食べても、文句なく美味しい。外は美しい夕焼けである。大震災の生々しい記憶と平和な現在、このつながりを詠むなかに生活の喜びが感じられる。

雨止んで蛙の合唱月止る

(気仙詠み人知らず)

「ぎゃわろッぎゃわろッぎゃわろろろろッ」

(誕生祭 草野心平)

第3面のコラム「あたりほどり」に「カエルの大合唱、ほしい見事な統率力」が掲載されている。長い水田稲作文化を持つ日本では、田植えから始まるカエルの合唱はなじみ深いものである。コラムでは、日本が生んだ世界的指揮者である小澤征爾氏の見事な統率力チームワークを述べている。同じ統率力でも強力なオーム宗教団体の統率力では困るのである。その統率力は何を指し、何を行うための統率力であるのかを明らかにしなければならぬと思う。

雨止んで蛙の合唱

月上る(気仙詠み人知らず)」、この句は大震災の瓦礫の山に降った雨が止み、蛙の合唱が始まり、月が瓦礫を照らしている情景を詠んでいるが、そこには苦難、忍耐、夢、希望など、被災を乗り越えて地域で生きる気持ち、蛙の合唱に合わせていると思われる。「ぎゃわろッぎゃわろッぎゃわろろろろッ」

(誕生祭 草野心平)

草野心平の詩「誕生祭」の抜粋である。人間の誕生、生物、地球、そして宇宙の誕生につながる世界を詩に表現した草野心平はいうなれば(自然と心のつながり)の世界を指しているものと思わます。

(生兵法は大怪我の基)

6月9日の第1面の「世迷言」には「結末は始めからわかっているのにそれをあえてすることを「無分別」と呼ぶ。駐中国大使に丹羽宇一郎氏を任命した政府の認識がいかに甘かったか、ごみ同様これは分別が必要だったのだ。」と述べられている。

今、この政治家は「分別ごみ」のように国民が日常生活の中でふつうに行わなければならないことなのだ。政治家は敬意を払うべき分別をもっていないという考えである。六十年を超す、自民党政権が国家運営への緊張感を失って、党利党略、自己利益追求にふけていたが、その付けが、民主党という素人政治集団のマニフェスト選挙という甘言に敗れた。しかし民主党政権は国家運営の素人集団であることが経済、外交に如実に表れてきている。これでは国民が困ってしまいます。明治維新の国内政治の戦いで、新政府に敗れた後に、岩手県からは、原敬、齋藤 実、後藤新平、米内光政などの優れた政治家が生まれた。しかし、現在はどうなっているのだろうか。民主党の誕生に力を注いだ岩手県出身のベテラン政治家にも、深い経綸の哲学が欠けているように見える。これでは、彼の政治行動は、まさに、「生兵法は大怪我の基」、であり、注意が必要であると思われる。